

# 第5回 金沢の景観を考える市民会議

日 時：平成29年2月25日（土）

会 場：金沢歌劇座2階大集会室



金 沢 市

## 目 次

あいさつ	1
金沢市都市整備局長 野口 広 好	
金沢市景観サポーター・景観みまもりたい活動報告	2
報告者	
藤 澤 秀 男	
河 合 外志郎	
中 田 廉 子	
上 田 律 子	
馬 場 要	
吉 岡 佳寿芽	
講演「橋梁照明による風情ある川筋景観形成」	16
講 師	
近 田 玲 子（照明デザイナー）	
パネルディスカッション「川筋景観の魅力を考える」	22
コーディネーター	
川 崎 寧 史（金沢工業大学教授）	
パネリスト	
近 田 玲 子（照明デザイナー）	
小 林 史 彦（金沢大学講師）	
小間井 隆 幸（金沢片町まちづくり会議前会長）	
川 端 すぎな（金沢市景観みまもりたい）	
アンケート調査結果	36

## 第5回 金沢の景観を考える市民会議

日時 平成29年2月25日(土) 13:30~16:00

場所 金沢歌劇座 2階大集会室

### あいさつ

金沢市都市整備局長 野口 広好

金沢市都市整備局長の野口です。開会に当たり一言ご挨拶を申し上げます。本日は、第5回「金沢の景観を考える市民会議」に多くの市民の皆様にご参加をいただき、厚くお礼申し上げます。

また、ご臨席の金沢都市美実行委員会、並びに金沢市景観審議会、金沢市屋外広告物審議会・審査会の委員の皆様には、日頃より本市の景観行政に多大なご協力、ご尽力を賜っていることに、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

本市は、昭和43年の伝統環境保存条例に端を発し、以後、数々の独自条例による景観施策を展開してまいりましたが、この積み重ねをベースにして平成21年の景観法に基づく新景観条例へとつなげてまいりました。この市民会議は、この新景観条例の制定を機に、市民の皆様とともに新たな景観まちづくりの一步を踏み出すために、隔年で開催しているものであります。

今回のテーマは「川筋景観の魅力を考えよう」であります。本市においては、この4月に全国でも他に例がない(仮称)川筋景観保全条例が施行される予定となっております。金沢の歴史と文化を育み、生活に潤いを与えている犀川と浅野川沿いの景観を大切にしていこうというものであります。是非、皆様にもご理解とご協力をお願いいたします。

さて本日、発表していただく景観サポーターの皆様であります。金沢の景観に関心のある方々が、市民公募によって集まり、約2年間、市民の目線から本市の景観を調査・研究されました。この間の活動は、大変熱心に取り組まれたとのことで、本日はその成果を大いに期待しております。

北陸新幹線の開業から、はや2年がたとうとしていますが、ここ金沢の街には国内外からの観光客をはじめ、たくさんの人たちが訪れておられます。それ故、これまで以上に、金沢らしい景観を維持し創出することが重要であります。今後も市民の皆様方とともに、本市の個性を磨き高め、金沢らしい美しいまちをつくっていく活動を維持していくことが必要です。

そのために本日の市民会議が実り多いものになることを期待するとともに、ご来場の皆さまに大変感謝を申し上げ、開会のごあいさつとさせていただきます。本日はよろしく願います。

## 金沢市景観サポーター・みまもりたい活動報告

### 景観サポーター・景観みまもりたいの活動概要（藤澤）

それでは、景観サポーターと景観みまもりたいの活動報告をさせていただきます。私は景観サポーターの藤澤秀男です。どうぞよろしくお願いいたします。

（以下、スライド併用 #印）

#

私たち景観サポーターと景観みまもりたいは、金沢市長から任命され、金沢の景観に関する取材や調査を行い、良好な景観形成のために活動する市民ボランティアです。



#

景観サポーターの取り組みについては、金沢市景観総合計画に基づき、活動の概要は①点検：市内の景観チェック、②取材・記録：金沢特有の景観資源の調査、③参画：景観に係る計画策定への参画、④誘導：市民や事業者に対する景観誘導の4つです。

#

この4つについて、景観サポーターと、景観サポーターとして活動した者のOB組織である景観みまもりたいとで協力して取り組んでいます。現在、第4期の景観サポーターが活動しており、11名が登録しています。また景観みまもりたいは16名が活動しています。任期は平成27年5月から平成29年3月までの2年間です。

#

こちらは、毎月の連絡会議の様子です。金沢の景観についての基礎的な知識や情報を共有し、メンバーの共通認識を高めるため、定期的に話し合いをしています。活動されている皆さんは常に景観に対して問題意識が高く、金沢に深い愛情がある方々です。従って、共通認識が得られやすく、活動もスムーズでした。

金沢美術工芸大学教授によるまちのデザインに関する講座や、まちなみに合った看板を作ってもらうための裏話など、興味深い話を聞く機会もありました。

#

調査活動としては、グループや個人で建築物や広告物の他、石垣や坂道など景観を構成

するさまざまな要素について取材・調査をしています。「金沢らしい」というテーマが主題ですが、それは歴史の重層化が景観となり、金沢らしい風情として感じられるためだと思います。私のテーマは「小さな坂と石段」でした。調べてあらためて金沢の奥深さと、坂の数の多さを実感しました。何となく見ていたまちなみが、ある要素に注目してみると、いろいろなことに気が付きます。今までより楽しくまちを歩くことができるようになったというメンバーもいます。

#

これは調査結果をまとめた調査票の一例です。金沢の「何となくすてきだな」と思っていたことを具体的に確認でき、またこの景観を守っていくために、さまざまな立場の人が努力されていることも知ることができたという意見もありました。

このような機会が与えられたことに感謝します。なお、それぞれの報告書については、会場の後方に置いてありますので、ご覧いただければ幸いです。

#

また、金沢のまちなみに彩りを与えている、暖簾（のれん）の話や、四季の美しさを感じる植栽や街路樹についてなど、金沢の景観について気付いたことを、さまざまなサークルなどへ出前講座も行っています。

#

さらに、新聞の取材を受けたり、テレビ出演などもし、たくさんの方々に金沢の景観の魅力伝える活動もしています。

#

本日は、調査活動の結果の中から、ご覧の五つのテーマについて、各担当から調査結果を報告します。それではよろしくお願ひします。ありがとうございました。

### 「街のうるおい」（河合）

#

景観みまもりたいの河合外志郎です。よろしくお願ひします。「街のうるおい」についてお話ししたいと思ひます。

これは「街の中の自然」ということです。

#

街の中にある自然は、生活に潤いを与え、街を個性的で魅力あるものにします。この写真は犀川です。川と桜という自然景観ですが、こういう中で生活できるということは大変幸せなことです。

#

これは山と川がつくる代表的な街の自然景観です。これは犀川と、あと医王山から連なる山並みですね。これが大変きれいな自然景観をつくっています。それが街の中に見えるのは大変幸せなことです。

この山並みの一番右側に、少し見にくいですが、少し三角になった尖った山があるのですが、これが加賀富士という山で、大門山という山です。



#

これは浅野川大橋から見た、卯辰山と浅野川の景観です。卯辰山の緑と浅野川の緩やかな流れ、これらがつくる景観が大変金沢らしい景観ではないかと思えます。この辺は観光客の方はかなり人気のある場所です。

#

これはひがし茶屋街ですが、卯辰山があることで落ち着きと潤い、趣のある空間となっています。この通りは、奥に卯辰山の緑があるということで大変落ち着いた空間になっています。これが卯辰山がなくて、ただの通りだと、少し趣がないかなという感じです。

#

これは街の地形がつくる景観なのですが、寺町台地が造る河岸段丘です。それと犀川と段丘の石垣、その前に桜があるということで、これも大変個性的な景観ではないかと思えます。

これは桜橋なのですが、桜橋の欄干がピンク色で桜の時期にはかなり合った景観で、やはり桜橋という感じに思えます。

#

これは新桜坂から見える医王山です。医王山もかなり特徴的な景観の山で、医王山とその横にある奥医王、この二つの峰がありまして、その間に夕霧峠がある。これはかなり金沢の街から見える山ではないかと思えます。これも金沢の個性ですね。

#

これは金沢市役所の横の通りから山並みが見えるのですが、こういうものは見えているのだけれどなかなか意識にはないと。要は街の中に溶け込んだ景観ということで、こういうものは意識にないのですけれども、自然景観の一つということです。

#

こういう場所が何カ所か金沢にあります。これは豎町交差点から鱗町の方を見た写真なのですが、ここでも通りの向こうに山が見える。この辺もなかなか見ていないのではないかなという気がします。

#

これは寺町の通りから見える山です。こういうものも写真に写すと見えるのですが、普通に歩いているときは、多分、見ていないのではないかと思います。

#

これは香林坊の方から片町を見たものなのですが、看板や道路標識でかなり雑然とした景観になっているのではないかと思います。上の方のビルの間など、ここも山が見えます。こういうものはほとんど誰も見ていないのではないかと。これは見える場所は結構限られていて、この時期だと街路樹の葉っぱがないので見えるのですが、普通はあまり見えないのではないかと思います。

#

これは同じ香林坊の交差点なのですが、これは見る方向によって全然雰囲気が変わります。これは自然豊かな樹木があって、自然豊かな感じになっています。こういうふうと同じ場所でも見る方向によって景観が変わるということは大変面白いと思います。

まとめですが、「金沢には個性的で魅力的な自然が各所に存在している。これらの潤いのある景観をこれからも大切にしていかなければいけない」というのがまとめです。

以上です。どうもありがとうございました。

### 「金沢らしい景観を支える看板」（中田）

#

「金沢らしい景観を支える看板」というテーマで、景観サポーターの中田廉子が発表します。よろしくお願いします。

この写真の看板は、料亭壽屋の船板で作られた看板です。趣のある建物によく似合った看板だと思います。

#

金沢らしい景観を支える要素の一つとして、看板を取り上げ、グループで調査しました。金沢には老舗のお店がたくさんあります。その多くは、建物も古い趣を大切にしており、お店のシンボルとして看板が残されています。伝統的な看板の価値について見直してみました。

#

今回調査したのは屋外の木製看板です。やはり趣のある建物に似合った看板が多く残されています。

#

他にも多様な看板、例えば地面に置いてあるものや陶器で作ったもの、さらにもともと屋外にあったものを保護するために室内に入れたものなど、今後またこういうものを調査していきたいと思っています。



#

次に、細野燕台という、ふるさと偉人館にもコーナーを持っている人の看板を二つご紹介します。金沢最後の文人といわれ、北大路魯山人を育てた人としても有名です。

一つ目は、兼六園下の廣瀬印房というお店です。風雪にさらされてかなり傷んでいました。それを修復して、今はとても素晴らしい文字によみがえっています。

#

もう一つは、尾山神社という素晴らしいロケーションの前にある黒田龍華堂という美術品のお店です。この文字も「細野燕台が書いたものを看板にしました」とおっしゃっていました。どちらも末永く残ってほしい看板です。

#

看板はお店のシンボルです。お店がなくなれば看板もなくなります。商店街に活気がなくなれば、お店の数も減ってしまい、まちなみとしての良さも失われていきます。趣のあるまちなみが残ることで看板も残り続けてほしいと願っています。

今、まちなみとして気になる場所を2カ所取り上げてみた。

#

まず一つ目が兼六園の茶店街です。ここは面として看板とともに残っています。ただ、割れたままで放置されているお店もあります。

#

この茶店街の中から、堤亭というお店を取り上げました。不老坂という坂に面して三つ木製の看板があります。さらに百間堀通りに面して四つ木製の看板があります。合計七つもの看板が一つのお店にあるというのは普通では違和感があるのですが、この茶店街というにぎやかな雰囲気によく溶け込んでいると思います。



#

この茶店街がいずれなくなるかもしれないと危惧しています。

#

それはどういうことかといいますと、まずお城の丑寅櫓から見た茶店街の掲示板ですが、一番右端下にある、見にくくて恐縮ですけど、屋根の半分だけ残っているお店があります。これが平成 23 年に撤去されて、今は藤棚になっています。ここは昭和 39 年に制定された石川県都市公園条例という条例で私有物を建ててはいけないところです。既に建っているお店については、後継ぎが経営する場合のみ継続を許すという場所になっているのです。

今、たまたま右端だったのであまり違和感がないのですが、この面としての茶店街が、くしの歯が抜けたように数が減っていくことになると、少し寂しいなと思います。ただ、もともとお殿様のお庭だったのだから、自然に帰っていけばいいのではないかなという考え方もあると思いますが、関心を持って見ていきたいと思っています。

#

次に、尾張町界隈についてお話ししたいと思っています。老舗のまちなみなので趣のある看板はいろいろありますし、前田利家ゆかりのまちですので、利家のころから経営している細字印判店というお店も残っています。

#

木製の看板はこのように大変存在感のあるものが幾つもあります。その中から四つのお店をご紹介します。

#

まず最初、不室屋さんですが、この大きい方の看板が板橋興宗という大乘寺の住職さんの文字です。小さい方の看板が横西霞亭という書道家の文字です。

#

この近くに中六屋というお店屋があります。木製ではないのですが、横手にこのブリキの看板があって、まちなみにとてもインパクトを与えているなと思って取り上げました。

#

三つ目は石黒商店、薬屋さんです。この建物は金沢市の指定建造物で、江戸時代の末からあったものだそうです。看板も建物に非常によく似合っているなと思っていましたが、実はレプリカで、本物は岐阜の薬の博物館へ行っているそうです。

「とても古く見えるのですが」と伺いましたら「わざとそのように作ってもらったのです」というお答えでした。

#

最後に森中商店。油と漆を卸すお店ですが、加賀藩の御用達でした。この看板、字がともくっきりしているのですが「最近塗り替えてはっきりさせました」とおっしゃっていました。

#

この森中さんや石黒さんのように、建物と看板が金沢らしい景観を支えている雰囲気のお店が、面ではなくて点として存在しています。その点の数がだいぶ変化をしているので、地図を見て比較したいと思います。

まず平成4年の尾張町商店街ですが、博労町から橋場寄りになります。70軒ありました。それが平成25年になると39軒ということで、半分ちょっとになっています。

#

では、尾張町の面としてのにぎわいはどうかというと、新幹線開業以来、観光客の流れがすごくたくさんあります。金沢駅、近江町、東山というふうに流れてくるのですが、卸のお店が多い関係上、どこに立ち寄っているのかなというのが気になります。

ということで、この商店街が今の数のままで、今の趣のままで残ってほしいなと願っています。

#

金沢の景観を広告物という視点から見直してみると、新しい魅力が見えてくると思います。会場の後方に私たちが推薦する看板のカルテがありますので、どうぞ手に取ってご覧ください。

ご清聴ありがとうございました。

### 「街の記憶～高度経済成長期の建物たち～」(上田)

#

景観サポーターの上田律子です。「街の記憶～高度経済成長期の建物たち～」というテーマで報告させていただきます。よろしくお願ひします。

これは昭和40年ごろの香林坊交差点です。片町方向を見えています。

#

そしてこちらが、同じ場所の平成26年ごろのものです。随分と街の様子が変わってきました。皆さんの記憶の中にある街は今も残っていますか。思い出深い建物がまだあるでしょうか。

それでは、当時の建物とその特徴を併せて紹介させていただきます。

#

当時の建物を探すときに一番見つけやすいのはタイルです。これは駅前にあるホテルです。昭和 38 年の建物です。

このタイルはスクラッチタイルといって、くしで引っかいたような細いみぞの模様があります。れんがからタイル期に変わる過渡期の材料で、一時的に流行しました。



#

こちらは釉薬タイルのビルです。釉薬タイルは釉（うわぐすり）を塗って焼いたものですが、当時はまだ規格が決まっていなかったなので、焼き方で色むらができたり、釉薬の加減で仕上がりが変わってきました。

この二つのビルは、それぞれ緑色のタイルを使っていますが、全然表情が違います。左側の写真屋さんのビルですが、私も大好きな建物です。初めて見たときから、どこか引き付けられるものがありました。この街にはどんなドラマがあったのだろう。そんなことを考えると、当時の街のざわめきが聞こえてくるようです。

#

窓にも特徴があります。こちらのビルの窓ですが、角が丸くなっているのが分かりますか。これは当時、夢の超特急といわれた新幹線の窓をデザインに取り入れたものです。

#

こちらのビルも同じくタイルと窓の両方を取り入れています。

#

こちらのビルの特徴は階段室のブロックの人造大理石です。セメントに大理石を混ぜたモルタルを練って、表面を磨き上げたものです。ビル建築に多く使われました。

#

こちらは、片町のスクランブル交差点にあるビルです。昭和 40 年に建てられました。谷口吉郎さんの監修です。この時代を代表する建物の一つだと思います。

このビルの特徴は、端から端まで続く水平連続窓です。

#

そして、この茶色のタイルですが、有田焼の特注品です。

また、看板にも特徴があります。今ならパソコンできれいに作れる文字でも、当時はまだまだ手作業で作られました。だから、どこかゆがんでいたり、少しずれていたりするものがあります。それが独特の味になっています。

#

こちらのビルは、昭和 48 年の建物です。看板が特徴ですが、ずっと見ていると何だか顔のように見えてきます。この辺は学校もたくさんあって、当時はたくさんの子供でにぎやかだったのではないかと思います。騒がしい子供たちを、じろりと見ていたのではないかと、そんなことを想像します。

#

こちらは広坂にあるビルです。昭和 42 年の建物です。一階と上階で外壁の仕上げが変わるのも、この時代の特徴です。

正面の上部は丸く仕上げたタイル貼りです。大変ダイナミックで、迫力のある建物ですが、窓の格子は細やかで、繊細さも持ち合わせています。この格子のような金物は、単なる装飾ではなく機能を持ったものです。この時代の金物は、用と美を兼ね備えていて、これを作った人の熱意が伝わってきます。

#

こちらのビルは、南町にある銀行です。昭和 43 年ごろに建てられました。柱型や梁型がむき出しになっていて、木造建築のようです。

これまでの建物は木造が主流だったのに対し、鉄筋コンクリートや鉄骨造の大きな建物に変わってきました。

デザインも自由にできるようになりましたが、やはり木造の日本建築の美のようなものも忘れてはいないのではないかと思います。

#

そしてこれは、今はもうないのですが、尾張町にあった北陸郵政局です。昭和 33 年の建物です。

下から見上げると、庇が重なって五重塔のように見えます。この時代の建物を回ってみると、庇が水平に出ている建物がたくさんあります。

以上が調査の概要です。代表的なものを挙げてみました。

#

最後に、少しまとめと感じたこととして、金沢の街はいろいろな時代の建物が隣り合わせに建っていることが分かりました。そのどの時代が欠けてもいけないと思います。これが金沢の街です。

#

高度経済成長期の建物は見落とされがちですが、金沢の歴史や景観を考える上で、重要な資源となっていると思います。

しかし、残念なことに、建物には寿命があります。今回、3年ほど街歩きをしてきましたが、3年前にあった建物が今はもうなくなっている所もありました。これは、仕方がないことで、どんなに素晴らしい建物でも、いつかなくなってしまう可能性があると思います。しかし、確かにそれはそこにあったのです。

その建物を造った人の思い。そこを訪れた人の思い。いろいろな思い出の詰まった建物。それがこの街をつくってきたのだと思います。そして、そのことを記憶することが、後世に残る街をつくり、歴史をつなぐことになるのではないかと思います。

以上です。ありがとうございました。

### 「樹木を通して感じる金沢らしい風情ある景観」（馬場）

#

（馬場） 景観サポーターの馬場要です。よろしくお願いします。

私は、観光客から「金沢は心が落ち着くまちですね」とよくいわれます。その要因の一つとして、まち中の樹木の緑も大きな要素ではないかと思います。

そこで、そのような樹木が景観にどのような効果を与えているかを調べました。



#

こちらのよう、眺めて楽しめる樹木が市内ではたくさん見られます。

#

こちらは浅野川大橋付近にある柳の木です。この右の上の方の赤丸の部分には何本か柳の木があります。今ではこの場所は多くの観光客が歩いている場所でもあり、柳の木が醸し出す情景に「金沢」というものを感じていただけるのではないかと思います。

#

兼六坂を上り切ると、ここも緑に囲まれております。まさに「杜の都金沢」。しかしながら、この緑のこの赤丸の部分、ちょうどこの信号の部分なのですが、兼六園に入る小立野口の方の向かい側に小さいながらもこの緑地帯があるのですが、もしこの緑地帯がなかったら、この景観も生まれてこなかったのではないのでしょうか。

#

こちらは、21世紀美術館と市役所の間から眺めたものです。奥まで木々の緑が見渡せま

す。もしこの赤丸の部分、ちょうど柿木畠に入る所ですが、この部分の樹木がなかったなら、このような景観にはならなかったと思われま

す。また、ここには惣構の遺構もあり、金沢にとって非常に大切な緑だと思います。

#

長町の大野庄用水沿いのエノキです。石垣から生えているので、私は勝手に「ど根性エノキ」と呼んでいますけれども、まさしく武家屋敷跡の雰囲気、用水と相まって独特の風情が感じられます。

#

こちらは、浅野川の天神橋と梅ノ橋の間の松並木です。この松並木があることにより、マンション群の威圧感をしっかりと抑えてくれると思います。

#

まとめとして、その樹木がその場所にあることで「眺めて楽しめる」「金沢の昔を感じることができる」「あたかも緑が奥まで続いているかのよう」「景観としての負の部分の隠してくれている」。このように、この調査を通して、市内の樹木は周りの景観に大変大きな効果をもたらしていることを感じました。以上で私の報告を終わります。

#### 「現代建築とまちなみ」(吉岡)

#

この建物は、北安江にある金沢勤労者プラザです。今から 33 年前に金沢都市美文化賞を受賞した建物です。

#

こちらは平成 25 年に受賞した、公園下にある名古屋高等裁判所金沢支部です。私は、金沢市景観みまもりたいの吉岡佳寿芽と申します。よろしくお願いいたします。

#

今日発表させていただく内容は、金沢都市美文化賞の過去 38 年にわたる受賞作品の受賞後の現況について調査した結果を、「現代建築とまちなみ」と題してご報告させていただきます。

#

約 400 件の調査結果より、金沢の景観を向上させているのではないかと考える幾つかのキーワードを見付けだし、分析してみま



した。

#

例えば、街路樹についての分析例です。受賞時の香林坊交番です。この建物は現況を見るまでは、なぜこれが受賞したのかよく分かりませんでした。

#

ところが現地へ出向いたところ、受賞時の写真と何かが違うのではと感じました。受賞当時と比べ、樹木が少し増えただけで美しい景観が出来上がることに気付かされました。

#

次は、造園および無電化に関わる分析の例です。受賞時の金沢市立中央小学校の写真です。この写真を見る限り、周囲の電線や電柱がせっかくの建物を邪魔してしまい、建物の良さや景観美を阻害しているように見えてしまいます。

#

用水沿いに造園空間が加わったことで、この建物が本来の姿を現し、松の木や柳とのコラボが一層この小学校の景観を引き立たせているように感じました。造園と無電柱化の効果が、金沢らしい景観で発見できた場所です。

#

このように、見付けだした幾つかのキーワードの中から、最近特に目立ち始めたガラス建築について、メンバーで考えたことをご報告します。

#

こちらのグラフは、受賞作品の建築素材を調べてみた結果です。コンクリートからガラス建築が徐々に増えていることが分かります。

#

ガラス建築で、ある疑問が出ました。それは「木質系で柔らかな町家づくりに対し、どちらかといえば冷たいイメージのガラス建築が、なぜ抵抗なく金沢のまちなかに見受けられるようになってきたのか」という疑問です。

そこにはある共通点があることを見付けだしました。

#

第一の共通点は、その外観です。ガラス建築に、昔から親しみのある格子や障子の模様がなされていること。当たり前のように感じるデザインが、金沢の人たちにも違和感なく受け入れることができる一つではないでしょうか。

#

格子模様が目立つデザイン例です。駅西にある金沢パークビルです。最近整備された駅西広場の舗装とパークビルの格子のデザインのバランスがとても良く、金沢らしい歴史的感性を感じました

#

こちらも格子模様の例です。玉川町の三谷産業ビルです。この建物は次に示す景観が印象的でした。

#

一步引いて、眺めてみたときの景観です。ガラス建築と玉川公園の樹木がよくなじんで不思議な雰囲気醸し出していました。

#

障子デザインの駅西中央ビルです。50m 道路の樹木やボックスウッド等の赤や緑、黄色の色彩対比は大変美しく、絵画のようで感動的な風景でした。

#

ガラス壁面に映る紅葉の景色です。ガラスに映る紅葉した樹木は、金沢の伝統工芸を代表する加賀友禅のように感じました。コンクリートと違い、周囲の景色を映し出すことが可能なガラス壁面だからこそ、また、そこに樹木があるからこそ、愛でることができる風景ではないかと感じました。

#

町家づくりとガラス建築のもう一つの共通点は、町家の格子戸とガラス建築のーフミラーの機能性です。目隠し機能があるということです。そこに生活する人々に安心感を与えてくれる大切な機能です。

以上がガラス建築が金沢のまちに受け入れられている理由ではないかと感じました。

#

また最近では、商工会議所や片町きららのように、庇風ガラス建築が見られるようになりました。雪国らしいイメージの建物だと感じています。

#

夜景を見て感じました。それは、格子が巧みに使われていたことです。昼は、格子を控えめにし、ーフミラーの機能を十分に生かしており、夜になると格子を巧みに使い、透き通って見えるーフミラーの欠点をカバーして、しっかりと目隠し機能を発揮するよう



に設計されていたからです。

#

雪景色です。この画像からもお分かりのように、庇風のガラス建築と古き時代を代表する薦掛けした土塀と純白の雪が加わったこの風景は、まさに季節限定の金沢の景観美といえるのではないのでしょうか。

#

今回調査した結果から見えてきたことをまとめると、次のとおりです。

「受賞作品は、その時代の背景を映し出す鏡である」「金沢の人は中間色や自然になじみやすい景色を好む」「受賞作と都市整備のコラボで、より美しい景観美が生まれる」「壁面に映し出される風景は、金沢の景観美の一つである」。

以上で「現代建築とまちなみ」についての発表を終わらせていただきます。

#

これで、景観サポーターとみまもりたいの発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## ・講演「橋梁照明による風情ある川筋景観形成」

近田 玲子 氏（照明デザイナー）

（司会）講演に先立ち、近田様のご紹介をさせていただきます。

照明デザイナーの近田様は、東京芸術大学美術学部を卒業され、1986年、株式会社近田玲子デザイン事務所を設立されました。東京芸術劇場の改修や九州国立博物館の他、金沢城公園いもり堀の石垣や、玉泉院丸庭園の照明など、設計をしていただいております。住宅から都市に至る幅広い分野で、多くの建築照明、環境照明を手掛けておられます。

本日は「橋梁照明による風情ある川筋景観形成」と題して、ご講演を頂きます。それでは近田様、よろしくお願いいたします。

皆さんこんにちは。照明デザイナーの近田玲子です。浅野川に架かる橋の照明を2橋、去年完成させました。浅野川の橋、4橋の照明設計に携わった経過も含め、川筋照明による風情ある川筋景観形成についてお話し申し上げたいと思います。

私は、先ほどの景観サポーター・景観みまもりたいのお話を伺っていて、皆さんすごくいろいろ検討したり研究していらっしゃることにびっくりしました。私が金沢に関わり始めたのは1998～1999年あたりからですので、もうかれこれ17～18年になろうとしております。住んでいるところは東京ではございますが、金沢にも何か第二のふるさとのような思いを持っている者です。その近田という照明デザイナーが、どんなことを考えて金沢の光を作ってきたかということが、もしお話しできたらうれしいと思います。

（以下、スライド併用 #印）



#

浅野川と犀川がどこにあるかはもう皆さんの方がよくご存じだと思うのですが、この中で浅野川沿いの橋、4橋をお手伝いしたことを少しお話し申し上げます。

私が金沢の仕事をするときに、どんなふうを考えるかということ、歴史的にどういう存在であったかから考えると、ものすごく感情移入がしやすいのです。この川の場合も、小説に取り上げられた浅野川とその橋について、どんな方々が関わっていたかを考えました。

まずは三島由紀夫の『美しい星』に描かれた浅野川大橋です。三島由紀夫は、自死したときの激しさがすごく記憶に残っています。その激しい三島由紀夫がこの穏やかな浅野川

に寄せた思いが非常に不思議だし、逆に言うと、その三島由紀夫に好かれた浅野川も非常に大きな驚きの一つでした。

それから、徳田秋聲の進路を決めた浅野川大橋の上での上級生の一言。徳田秋聲は、実は私はあまりなじみがないのですが、自分の進路を決めるという場所だったという、そこが非常に大きな浅野川の浅野川たる由縁かなと思いました。

それから泉鏡花です。彼こそは金沢の文人というか、私が読んだ本の中でも非常に印象深い作家の一人です。芝居「滝の白糸」で知られる泉鏡花の『義血侠血』に登場する中の橋、天神橋、梅ノ橋。まさにこの橋、この川が泉鏡花にどんなに大きな影響を及ぼしたかがよく分かるところです。

三島由紀夫、徳田秋聲、泉鏡花、そういった方々のその背景を考えた中でこの川とこの橋を考えてみると、まさに歴史の中で生きてきた橋である、川であるということがよく理解できました。



#

浅野川大橋と梅ノ橋、それから天神橋と中の橋という四つを手掛けたわけですが、時期的には、浅野川大橋と中の橋については平成 29 年度完成する予定です。

「金沢らしさ」を考えてみたとき、光の在り方、光の色と明るさについてまず考えます。

#

光の色については、ひがし茶屋街に代表されるように、暖かみのある色の光が柔らかく当たっている。そのような光が、金沢の光といえると思います。

#

もう一つ、茶屋街だったこともありまじょうが、色が少しあってもいいのかなということを、最初は考えました。

#

これは茶屋街の裏路地の辺りです。

#

こちらは主計町の辺りの光の様子です。

#

浅野川の照明デザインの検討に当たって、最初に現況はどうか。目的としてはどんなことをやるのか。それから修景の方針。この三つが挙げられています。

「浅野川に架かる橋梁の照明は通行者にとって川筋景観特有の風情ある夜間景観を演出していると同時に、上下流に架かる橋からの眺望景観の構成要素としても機能している」。大変お役所的な言い回しですが、浅野川大橋という橋が通行のための主要な橋でもあるということから、機能性がまず第一には大事であるということをおっしゃっています。

それから、先ほど来から言っている川筋景観として、全体にまとまった、まちの景観と合わせた橋の照明でありたい。そんなことが目的になるかと思えます。

修景の方針なのですが、「金沢らしい夜間整備計画」というものを取りまとめられています。その中で金沢ということで、まず「①暖かみのあるあかり」にしたい。それから「②まぶしくないあかり」。それから「③地域特性に応じたあかり」。地域特性という言い方はお役所的な言い方になりますが、まさにこの川筋景観ということと歴史的な風情、このようなことがいえると思えます。それから「④生活からにじみでるあかり」。これも景観、夜間整備としてはそうですし、今回の橋の照明の場合には、生活道路としての照明ということがいえると思えます。

#

最初にどんなことを考えたかを、今、お示ししております。四つの橋のうち、まず一番左上の写真が浅野川大橋なのですが、通常アーチ形の橋の場合、側面を照明するケースが多かったものですから、何とかアーチの内側を照らしてはどうかと一生懸命考えたわけです。これは今年やる橋ですので、どんな計画になったかについての経過を後ほどお話ししたいと思います。

右上の写真は中の橋、左下が梅ノ橋です。この二つの橋はほぼ形状、断面が似ております。ただし、長さが梅ノ橋の方が相当長いです。70m 近くで、中の橋に比べると約 1.5 倍ぐらい長い橋でした。

中の橋の場合は、一番上の高欄に擬宝珠（ぎぼし）がある橋でございます。

右下が天神橋です。一番歴史が浅そうな橋ではあるし、形としてもよく見掛ける橋なのですが、これも形が非常に美しい橋の一つでした。照明としては、今、最初にイメージしたものをお目に掛けていますが、浅野川大橋については水に映り込む形を強調したい。それから、梅ノ橋と中の橋については、非常に細い橋の、何というのでしょうか、下にスカートのようなものがあるのですが、それが何か特徴的に表現できるといいかと思っていました。

それから天神橋については、これも光としては表現の仕方がいろいろあったとは思いますが、アーチの方、アール型をあまり強調してしまうと、何か都会的、都市的過ぎるのではないかと。この橋の場合にはむしろ縦の軽やかな方、橋を支えている柱を見せることによって、もっと景色に合う光にしたいというようなことを考えました。

#

これは浅野川大橋の照明をどう考えたかをまとめたものです。これは昼間の景色です。橋の上の光が映り込んではおりますが、橋そのものが川面に映り込んでいないことが何とかならないかと、まず考えました。

#

最初にイメージを写真でもお見せしたように、アーチの中を照らす実験をしたわけです。これまでにない橋の照明として是非やりたかったのですが、水害に遭う可能性がある。つまり、増水したときに照明器具が流される恐れがあるということで、結論から言うと、これはどうも難しいということになりました。

#

それで、最終的には橋の側面を照らそうということで、今、計画が進んでいるところです。

#

続いて、梅ノ橋です。中の橋はこれから今年度の施工になるのですが、同じ照明としてお話し申し上げたいと思います。

#

梅の橋は既に照明はされていました。先ほどスカートと呼んだところをどうやってきれいに見せるかが、私どもがいろいろ試行錯誤したところでした。現状、投光器で端から照らしているのですが、非常にまぶしい。

#

橋の真ん中にポールが立っています。昼間見た様子はこんなところですが、夜、このポール灯からの光がまぶしくて、橋そのものがなかなか見えにくい。そのようなことを問題点として挙げました。

#

これは中の橋で実験している様子です。擬宝珠がある橋の柱、手すりの柱、支柱、先ほどのスカートを細い小さい光で上から照らしてはどうかということを実験した様子です。

ところが、うまくいきませんでした。結論から言うと、こういう照明ではこのスカートが美しく見えない。

#

これは梅ノ橋で実際に実現した様子です。同じようなことを中の橋でもやるということでお話し申し上げたいと思います。

#

これは、梅ノ橋での実験の様子なのですが、手すりの上の側に細いLEDを仕込んで、床、橋の路面を照らそうということをやっております。

#

これがその路面を照らした様子なのですが、ちょうど手すりの所も非常にくっきりと光としても見えるようにすることができました。

#

併せてスカートの部分についても、実は照明方法としてはこれまでと同じではあるのですが、まぶしさを隠すフードを取り付けました。

#

これが路面を見たところなのですが、まさにこれは、雪の日の光にぴったりだと思いました。雪がなくても橋の歩く面に光が当たって、まるで雪あかりのような効果が出せたと考えております。

橋の真ん中にあったポール灯と両端にあったポール灯、これらのまぶしい光を取り外しました。川の両側のポール灯については、金沢市の方でまたまぶしさが軽減するようなものに変えていただいているようです。

#

この雪景色の、雪のときの川の様子ですが、非常にくっきりと際立って見えるようになったと思います。

#

この画像は浅野川大橋側から見た梅ノ橋なのですが、その橋のお隣の橋から見た景観、川筋の道路から見た景観、両方から美しく見えて、両方から景色に溶け込む。そういう景観にすることが望まれているものでした。

私どもが実験や調整をするときには、隣の橋から見てどう見えるか、川の両側の道路から見てどう見えるか、橋の上から見てどう見えるかに大変気を配りました。そして、まぶしさをない光、安全な光、足元がきちんと見えるかどうか、そのようなことをチェックしました。

#

最後がこれ、天神橋です。画面の中の左下の図面のように、どれぐらいの明るさが取れるかをあらかじめチェックをします。これはどの橋も同じですが、明るさをチェックして、それで照明の設置をし、照明のワッテージとか、器具の大きさなどを決めています。

#

天神橋の場合には、橋のたもとに、ちょうど古めかしい元の照明、橋の真ん中の所にかなりまぶしい照明が取り付けられておりました。明るさはきっと十分だったと思うのですが、このまぶしい光があるが故に、橋そのものが見えにくいという欠点もあったことから、こういう光はできるだけ隠す照明方法を取っております。

#

親柱にあった器具も消えておりましたので、復元して付けております。

#

これは車の目線から見た様子ですが、車から見てもまぶしくなく、柱の連続感が美しく見える。そのような景色にすることができました。

#

こちらが梅ノ橋側から眺めた天神橋ですが、橋の内側が明るくなっただけではなくて、橋の下側の構造体を照らすことによって、この橋全体にリズム感をもう一つ加えることができたと思っております。

今まで真っ暗だった川面が、光が映り込むことによって明るい川になったのではないかと思っております。

向かい側から見たときにどうしてもほんの少しだけまぶしいところが残ってしまいました。それは何とか木で隠すとか、そのようなことで解決できるのではないかと思っております。

#

これは北國新聞に取り上げていただいたものです。

以上、橋の景観に対してのお話をさせていただきましたが、今年度というか今年ですね。浅野川と中の橋をやります。その浅野川につきましても、何度も実験をした上で、景観審議会の方にもいろいろお知恵を拝借し、市の方にもこの橋の場合ですと管理者が国だったり道路だったりするものですから、そういう方との調整もしていただき、何とかいいものになりたいと考えております。ご清聴ありがとうございました。

## パネルディスカッション「川筋景観の魅力を考える」

コーディネーター 川崎 寧史 氏（金沢市景観審議会委員、金沢工業大学教授）

パネリスト 近田 玲子 氏（照明デザイナー）

小林 史彦 氏（金沢市景観審議会委員、金沢大学講師）

小間井隆幸 氏（金沢片町まちづくり会議前会長）

川端すぎな 氏（金沢市景観みまもりたい）

（川崎） 金沢工業大学の川崎です。私は、市の景観審議会の委員をやっておりまして、今回、この司会の立場でコーディネートさせていただきます。

まず、私も、最初の景観サポーター、みまもりたいの皆さまのご発表を聞いて、大変感動しました。やはり景観やまちなみは、そこに住む人が築き上げていく。あるいは守っていくことですね。継承していくという必要があると思いますし、そのためには何よりも愛情がないとなかなかできないものであると思います。そういう意味で、活動のご報告を聞きながら、その裏にあるというのですかね、いろいろまちなみに対する愛情を持ったものを感じております。それに敬意を表したいと思いますし、これからもどうぞよろしくお願ひしますということをごまず申し上げておきます。

本日、ご紹介いただきました4名のパネリストの皆さまから少し話題提供いただいて、その後少しディスカッションしていきたいと思っています。

私からは一言だけなのですが、私は京都市の出身なのです。2001年に金沢に参りまして、今年で17年目を迎えるという立場です。いつも金沢を考えると、京都と相対化して、比較していろいろ理解しようと思います。優劣ではないです。

その中で京都と金沢は両方とも扇状地なのです。清廉な川がまちの中を流れております。あと、山の手には寺院群があります。京都もありますし、金沢もあります。川筋にはさまざまな界隈がありまして、生活にも根付いております。例えば浅野川でいうと、主計町や東山界隈ですが、京都でいいますと先斗町などという伝統的な界隈がありまして、納涼床もあります。あるいは、界隈としてこちらの片町ですね。小間井様のご活動の片町ですが、京都は木屋町というものがあります。やはり50万人以上の都市の中で清廉な川を持っていて、それがまちに潤いを与えているということは、非常に共通したところでもあります。

ということで、今日は美しい川を持つまちとしての豊かさのようなものを皆さまとともに考えていきたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

それでは、4名のパネリストの方々に、話題提供をそれぞれしていただきます。それで、その後にごつくばらんに意見交換をしていただきますが、お座りの順に。近田先生は橋の





照明のことはお話しいただきましたが、それに加えて、また金沢の景観について少しお感じになっていることをお話しいただければと思います。よろしくお願ひします。

(近田) 私が景観に関わり始めたのが1980年代でした。そのころは都市計画が日本各地でいろいろやられ始めておりました。それが今どうかというと、ほとんどの都市がシャッター街化しているのです。そんな中で、金沢はもう一回復活して、活性化を繰り返しているまちとして、非常に特異なまちではなかろうかと考えておられます。都市計画という意味で言うと、ヨーロッパのまちも1980年代ぐらいに再開発など繰り返しているわけですが、最近どうかと見てみると、決してシャッター街化していない。その日本との差は何かというと、ヨーロッパのまちの場合には、住んでいる人が自分たちが楽しむまちとして、育てているというところが大きな違いではないか。その点、私、今日お話を伺うと、金沢が大変活性化しているのは、まだお住まいの方がたくさんいるということも大きい要素ではないかと思いました。

よくある、寂れてしまうまちの一つのパターンとしては、住民がどんどん外に出ていってしまっ、まちががらんどうになってしまうというケースが多いわけですが、金沢の場合には、逆に言うと、外から住みたい人がいっぱい押し掛けているぐらいのまちではないでしょうか。そのために、実は気を付けなければいけないのは、マンションがどんどん建っていますよね。ことに浅野川大橋のときも、川筋に高いマンションが林立しておりました。幸い、高い樹木があるためにそれほど目立ちはしませんでした。高層のマンションは今後もきっと増え続けるのではないのでしょうか。そのマンションと同時に、私も前回来たときに、高齢者福祉施設も相当多く建ち始めているのを見掛けました。つまり、住みやすい。いいことだとは思うのです。ただ、それを景観としてどううまくまちになじませるか。なじんでいくか。そのようなことをうまくコントロールできると、住んでいる人が豊かなまちになるのではないかと考えました。

浅野川大橋、浅野川の川沿いの橋を手掛けたときに、実は両側のあの料亭に「一回ぐらひはああいうところで食べたい」と思ひまして、予約をしてみたのです。ところが、取れない。つまり、金沢の市民の方がどうやらいっぱい通っていらっしやる。「これは大変いいことだな」と思ひしていました。先頃ようやく、壽屋さんで食べることができまして、とてもいい歴史的な建物の中で過ごせたということがすごくうれしかったのです。金沢の場合、市民が支えるのではなくて、楽しむ。自分たちが楽しむまちということがベースにあることが、非常に大きいのではないかと思ひしております。一つ問題点としては、住宅の在り方ということがあかなというところでは。

(川崎) ありがとうございます。育むまちということで、楽しむまちということ、あるいは、住みやすさと景観という問題提起をしていただきました。どうもありがとうございます。

小林先生、よろしくお願ひします。

(小林) 小林です。今、近田先生の方からお話があったヨーロッパでは、金沢もそうだというお話だったと思うのですが、自分たちが住むまちとして、楽しみながらまちを育ててきている。ここを楽しみたいというライフスタイルがあって、そういうまちに自ら育ててきているという話だったと思います。これはすごく川づくり、川の景観を考えるときにも大事な視点だなと考えて、今、お話を伺っていました。

私の方から話題提供したいのは、そういう川を楽しむことを通じて、みんなの川への思いを盛り上げていくことも大事だということを、少し事例を踏まえながら紹介したいと思います。

(川崎) はい、よろしくお願いします。

(小林) 枚数をたくさん用意してきたのですが、ぱっぱといきます。

(以下、スライド併用 #印)

#

私は今、大野町という所に住んでいます。ちょうど浅野川の河口になります。金沢に来て私は 20 年になるのですが、大野に引っ越して 10 年です。大野というまちはすごくまちづくりが盛んなところで、よそ者でもいろいろ巻き込んでくれるのです。公民館の生涯学習部長をやらせてもらっていて、そこでまちの活動として川を楽しむイベントを毎年 3 回ずつぐらいやっています。

#

ちょうどこんな川です。今、漁船が見えますが、かつては北前船も来ていたような港町です。

これは私の家からの景色なのですが、私は実は本当に川のほとりに住んでいます。私の書斎といいますか、小さな 4 畳間があるのですが、そこから見えるのがこんな景色です。川といっても、ほとんど海のような川です。窓を開けるとこんな感じですが。潮の香りがいつも漂ってきますし、漁船の重油の香りなども漂ってくる、そんな所です。

#

歴史的に金沢は、川を楽しむという文化が蓄積されてきたまちだと思います。これは「蓮湖真景之図」と言っても、河北潟から大野川の河口にかけての川沿いの風景を藩のお抱え絵師の方が 19 世紀中ごろぐらいに描かれた絵です。この真ん中に見えている橋、これが今のご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、宝生寿司のある大野町のメインストリートに架かっている橋になります。

#

河口の方にはこういう船が着いていた。今のを見てもらうと、少し小さくて見えないの

ですが、いろいろな川で暮らしや生業の風景があって、川沿いの風景がすごく気持ちよく整っている。にぎわいと整った風景があるということが分かるかと思います。

#

多分、昭和 40 年代ぐらいから、川が汚れていく中で、そういうものが忘れられていった時期があったのだと思います。大野川でも川がだいぶ汚れて、昭和の終わりぐらいになると、町の壮年会のメンバーがまちづくりの提案をする中で、「川を埋めたら人口が増えていい。埋め立てよう」、そんな提案が出た時代もあったのです。

そこから今、だいぶ雰囲気が変わってきています。川もきれいになってきています。私たちはそういう川を生かす活動をいろいろやっています。

上にあるのが、かつての「蓮湖真景之図」です。下にあるのが、毎年私たちは大野の町家や醤油蔵や川など、30 カ所ぐらいを舞台にしたイベントをやっているのですが、そのときに作ったイベントチラシの表紙です。

大野町には陶芸家の方がたくさん来ていらっしゃって、絵がうまい方もいらっしゃるので、その方に上の「蓮湖真景之図」の現代版を描いてくれと言って描いてもらったのが下のものになります。そういうチラシを作ったりして、町の人にもう一回再認識してもらおうようなことをしています。

#

スーレボート、何かなと思うのですが、ボートレースですね。旧制四高の艇庫が大野川の河口にありました。

#

これは戦時中の写真のようですね。河口の右に見える、今、ヤマト醤油がある辺りに艇庫があって、こういうボートレース、競争が毎年あったそうです。町にもそういうボート部みたいなものあって、町対抗のレースもあったそうです。

こういう風景、川を楽しむ風景がかつてはあったということです。

#

そういうものが失われていく中で、これは平成に入ってすぐぐらいから始まったのですが、これは「リバーサイドフェスティバル大野」と言って、川を楽しむイベントが始まりました。これは町のメンバーがこういう仮装いかだを造って、川でレースをしたり。これはわれわれの先輩方がやってきたものです。

#

それから、かつてはこういう漁の風景があったり、生業の風景もあった。それもだいぶなくなっていく中で、投網などもあったのです。これは昭和 30 年代の写真です。

#

そういうものをもう一回思い出そうということで、ちょうど公民館の館長や副館長をされている世代の方が、ぎりぎり川で遊んだ思い出のある世代だったので「そのころどんな遊びをしていましたか」と聞いたら、防風林に笹が生えているのですが、その笹を切ってきて、その辺に落ちている石ころを結んで、その辺を掘ったら出てくるアカダという虫を餌にして釣りをしたという話を聞いたので「では、それをもう一回やりましょう」と言っていて、これは館長と副館長ですが、保育園の所の笹を切ってきて、みんなで釣りをするというようなことを、もう3年続けてやっています。こんなことをやっています。

#

結構じいちゃんばあちゃんが孫と一緒に楽しんでくれているという感じです。

#

皆さん、汚れてきた川を見て育ってきているので、僕はそこで釣った魚を平気で食べたのですが、「食べましょう」と言うと「えっ」と言うのですね。「いや、食べましょう」と言っていて、町の居酒屋のおかみにちょっと出てきてもらって、その場で料理をしてもらって、から揚げにして、このようにハゼなどいろいろ食べました。みんな最初は「えー」と言いながら、若い子らは平気で食べるのですが、ちょうど今60ぐらいの方が「えー、食べるの」と言いながら、食べると、「おお、なかなかおいしいね」というようなことをやりました。孫世代は平気で食うのです。

#

他に、漁師さんの番屋がたくさんあるのですが、そこで網から魚を外すような体験、こんなこともしました。

#

こんないろいろな魚が取れているのですね。最後、取れた、外した魚をみんなでじゃんけん大会をして持って帰るということをしました。

#

最後に、やはり川を一回、景色として見てみよう。昔ああいうすてきな絵を描いた人がいる。それと同じように自分たちも川を景色として見てみようということで、町の、船を持っている人をお願いして、船を出してもらって、川の上から町を眺めるということもしてみました。ただ眺めるだけではいけないので、写真を撮りましょうと写真を撮ってそれをFacebookにアップしたら、自慢するということを通じて自分の町の良さが見えるよねというようなこともしました。

#

こんなことをしてきました。大事だと思うのは、やはりある時期「埋め立てよう」という言葉が町の人たちから出てくる、そんな時代もあった。その中で、やはり川への意識が低下していった、川沿いに立つ建物の色や、川に向けて窓を付けるなど、そういう意識もどんどんなくなっていったと思うのです。そうするとだんだん川の景色は、やはり人々の生活から離れていってしまう。それを取り返すことはすごく大事なのだらうと思います。

そんな意味で、金沢のまち中は、まだずっとそういった文化が残っていると思いますので、そういうことを生かしていくことが、川づくりにおいて大事なのかなと思います。

以上です。

(川崎) はい、ありがとうございます。

(小林) すみません、少し時間オーバーしてしまいました。

(川崎) いえいえ。大野における川の生活や楽しみや豊かさの再確認ということを、活動報告をしていただきました。どうもありがとうございました。

小間井様、よろしくお願ひします。

(小間井) 私は金沢片町まちづくり会議の前会長と紹介されましたが、片町商店街で4期8年ほど商店街の理事長をさせていただきました。今は副理事長ということで、「片町きらら」という新しい再開発ビルの運用をさせていただいております。そういう関係で、片町には、もちろん生まれ育った町なので、非常に深く関わっております。この金沢片町まちづくり会議とは一体何なのということだけ先に少しご説明しておきますと、商業だけで考えると、金沢中心商店街まちづくり協議会という協議会があります。これは片町、香林坊、堅町、広坂、柿木畠という五つの商店街と大和とか、アトリオという、そういう大型店で構成された協議会です。そこのメンバーではあるのですが、この金沢片町まちづくり会議とは、そこにさらに地域の町会の皆さまとか、各種団体とか、そこで働く人、活動する人、さまざまな人と手を取り合って、多様な交流を通じて、金沢のまちを良くしていきたい。誇りあるまちにしたい、最近はやりの言葉で言うシビックプライドというものを高めていきたいということで、出来上がった会議です。

それを前提に、今日は川筋景観ということなので、そこに特化して少しお話をさせていただきます。まずこの会議で当初から犀川のことを語ったわけではないので、片町、香林坊を中心にしたにぎわいをどうつくっていくかという中で、やはりわれわれ、今、先生からお話がありました、犀川というものがまちの中心にあって、そこにわれわれの生活があって、豊かさがあるということは何気なく感じていたのに、いつの間にか川が遠くになって、今はランニングで疾走する人だけ使っているのではないかというぐらい、市民がそこで触れ合わなくなったと。

そんな中で、金沢のにぎわいを本当につくっていくには、この犀川を抱き込まないと駄目だらうということで、犀川を中心に何かできないかと。片町という歓楽街は、夜になる

と大勢の人でにぎわう。あの犀川が、実は夜になると真っ暗です。今度一度ご覧になってください。真っ暗です。そして、犀川沿いのビルはみんな犀川にお尻を向けて建っています。入り口は全部香林坊側に向いていて、犀川にお尻を向けています。夜になると真っ暗で、年に何回かというか、何年かに一回はあそこに飛び込む人がいたり、僕には奈落のように見えるので、これでは駄目だろうと。そして、野町から奥には西の茶屋街があつて、本来、金沢の中心街、歓楽街というのは、その川があつて向こうになまめかしい西の茶屋街があつて、奥深いものがあるはずなのに、いつの間にか東京や大阪の中心街にある歓楽街と同じようににぎわいになってしまった。これでは駄目だろうということで、川の向こう側の皆さんにもお声掛けして、みんなで何かできないかということで始めたのが、この会議でございます。



今、その中で何をやるかということで始めたのが「サイガワあかりテラス」というイベントです。もう手作り満載のイベントで、これで3年間やらせていただきました。規模としては少しずつ大きくなっていますが、まだまだこれから皆さまのお力を借りないといけないイベントかなと思っています。

では、ちょっとそれをご紹介させていただきます。

(以下、スライド併用 #印)

#

今、映っている場所で緑色のケースに入っているのは、実は輪島の「あぜのきらめき」という、ご存じだと思うのですが、千枚田に冬になると使うペットボトルというものです。

#

これは非常によくできておりまして、後でまた説明しますが、これは実は今年度ですから、去年の9月ですが、2万個を借りてきまして、みんなでセッティングしたわけです。

#

一部は、これは新塲校下の皆さんですが、子供たちと一緒に、ペットボトルを新たに作りました。それで、みんなで作ってやろうと。こういう形になるのです。

#

これが実は、今、作業しているのですけれど、これが片町の人とか飲み屋の人とか、いろいろな人が、市の職員の方もいるのですが、借りてきたペットボトルに電池を詰めて入れ替えてやるという作業なのです。これは金沢市の災害用の倉庫が泉本町にありまして、夏の本当に暑いときにみんなでここでペットボトルの作業をするのです。

#

それをこうやって、植えていくわけです。今年はよく分からなくて、少し間隔を狭くし過ぎました。何せ2万個と聞いた途端に、どうやったら埋められるのだろうと思ったのですが、今はもっと広げてもよかったなと思うのです。

#

これは、完成してみんなで記念撮影をしたのですが、こういう活動を3年間やってきました。今、ちょっと奥に犀川大橋が見えています。

#

先ほど近田先生からお話があった浅野川の天神橋、実はあれはワーレントラス工法といまして、犀川大橋がまさにそうなのですが、道路橋では多分、日本で一番古い橋です。国道ですし交通量が多いものですから、天神橋とは比べものにならないほど橋脚の梁が多くて、こういう橋なのです。

これは今年92歳なのです。もうじき100歳になるので、これからこの犀川大橋を大事にしながら、その犀川の景観をより豊かなものにしていこうというのも、狙いの一つです。

#

作業をみんなでやっています。

#

今年はたまたまジャズストリートという金沢市のイベントとコラボをしてやったのですが、こういうことをすることが目的ではなくて、こういうことをすることで、みんなで協力してそこで何かをする。そのつながり、そのコミュニティの醸成が大事だということです。

#

出来上がったのがこのペットボトルです。これは色が変わるでしょう。これは本当に理屈なもので、あれは2回色が変わるのです。何分かでのこのピンク色から黄色に変わるといって、2色の点灯します。

#

これはやっている皆さんが集まってきて、写真を撮ったりする風景です。

#

これは少し間隔が狭過ぎたのです。2万個と聞いた途端に焦ってしましまして、これはもう少し広げれば、もっと広範囲に楽しめたと思うのですが、初めての経験だったのでお許しを頂きたいと思います。

#

大変きれい。向こうに犀川大橋が光っています。この説明は後で少しだけしますが、これですね。これが92歳の犀川大橋です。

#

これはちょっと色が嫌らしい。赤く照らされていますが、これは実は片町商店街であった照明器具を無理やりに付けて色を変えてみたのですが、今はそんなことはしていません。

#

橋脚の梁が本当に多いので、これは近田先生もご存じだと思うのですが、関西で活躍されているLEM空間工房の長町先生という、この方もやはり女性なのですね。どういうわけか光のデザインをされる方は素晴らしい女性の方が多くてですね。

#

これは犀川大橋の手すりの所がありますよね。先ほどの先生のトライしていたのと同じように、あれは欄干の部分ですね。あの内側に、下に向けて細い線状のLEDを這わせてありますから、ああいうふうの下が光っているのです。

残念ながら、2月19日でこの照明は終わりました。何せ国の管理なものですから。しかし、われわれのあかりテラスの活動を見て、国も協力しようということで、これから一緒にいろいろなことをやってくれることになりました。

#

それから、終わったら今度は後片付けがまた大変でした。2万個を元に戻して輪島にお返しするという作業ですから、本当にやっている方は結構大変で、できれば輪島からお借りするというのは金沢市さん、どうなのでしょう。それはそれでいいことなのかもしれませんが、もうそれこそ自前で持てるといいなと思うのです。実は白山市も持っているのです。雪を使ったいろいろなことをするのに。なぜか金沢市は持っていないのです。借りているのです。これは少し考えてほしいと思いました。

一応、犀川大橋の関わりと、あかりテラスがどういう形で行われてきたかということだけ、今のご説明させていただきました。

(川崎) ありがとうございます。商店街がもう一度川と向き合うということとか、コミュニティーの醸成とかということをお聞きして、大変素晴らしい取り組みだなと思いますし、京都は、先斗町などは全部川に向いているのです。それで、店舗からすぐ納涼床などに出られるようになっていて、私も片町を見たときに「ああ、全部背を向けているな」と、少し感じたこともありました。ありがとうございます。

では、最後になりますが、川端様、よろしくお願ひします。



(川端) 景観みまもりたいの川端と申します。先ほどは私たちの発表を長いこと聞いていただきまして、ありがとうございました。市民のボランティア団体なのですが、非常にレベルが高くて、びっくりされたかと思います。しかし、私のようにレベルの低い人間も組織にぜひ入っていただきたいという PR も兼ねて、私はちょっと低い方のレベルの見本としてここに座っております。

川ということで、皆さんも川、いろいろな方で、お仕事で関わっていらっしゃるのですが、私はあくまで市民として関わっています。人は何か川に引き付けられるのかなと思ったのは、兼六園に行きますと、一番混んでいるのはやはり川があって、琴柱（ことじ）灯籠の所の橋はものすごく人気ではないですか。だから川も、もしかしたら人間が本能的にすごく引かれるものなのではないかと思っています。普段そういう川はあまり意識していないのですが、金沢に大きな、皆さんご存じの浅野川と犀川がありますが、これは普通にあると何とも思っていないのです。



私は人生の半分を名古屋で過ごしております、名古屋のまちの中には京都の川のようなものが走っていないくて、あるのは堀川という何か人工的な川です。先ほど、大野の川が昭和 40 年ぐらいにすごく汚れたというお話があったのですが、堀川は本当にどぶの臭いがすごくて、今も少しずつきれいにしてしようという運動はあるのですが、何か人工の張りぼての白い鳥を浮かべてみたりとか、間違った方向に行ってしまった時期もありました。ここで、やはり市民の意見も入れて、本当にみんなで良い景観をつくっていくというところに一回立ち止まる機会を設けていただいて、ありがたいと思っています。よろしく願います。

(川崎) ありがとうございます。今、名古屋のお話などが出ましたが、私は 4 年間、大阪に住んでいたこともあります。やはり大阪は水路のまちではあったのですが、かなり水も汚れていて、まちの営みと水の流れが良好な関係を保っている部分も、そう多くはないというようなことがあります。私もそうですが、やはり金沢や京都など、それだけではありませんが、川によって豊かさを残しているまちは大事だなという気がします。

それでは、皆さまから一言ずつ話題提供いただきましたが、いかがでしょうか。パネリストの方々から、何か今のお話等を聞いて思われたことなど、あるいはもう少しお考えが浮かんだようなことがあればお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

では小林先生、どうぞ。

(小林) 私がすごく印象に残ったのが、片町の小間井さんのお話の中で、飛び込む人が

いて奈落の底のような感じがするというお話です。地形的にもあそこは河岸段丘ですごく深くなっているの、そういうこともあるのかもしれませんが、それを聞いて、私は大阪生まれで、今、川崎先生からも少し大阪の川の話がありましたが、道頓堀の話を思い出しました。

道頓堀もやはり掘割で、大阪も水を江戸と一緒に、お城がある上町台地と、下町の埋め立てるような形で作ってきた所とで成り立っていて、下町の方はやはり堀なのです。水がよどんでいる。その中でかなり汚れていた時期があって、やはり道頓堀川沿いのビルはみんな道路側に顔があって、飲食店ばかりですけど、裏側はみんな室外機がずらっと並んでいるのです。それが平成になって、いつごろですかね、バブルの後ぐらいでしたかね。いつかはしっかり覚えていませんが、川沿いにリバーウォークを造ったのです。それで、川にボートを出して、そこを落語家などがちょっと案内しながら巡るようなアクティビティーが生まれたりなどしました。

そうすると、大阪の商人というのはやはり「これはもうかる」となると早いので、道頓堀側にみんな顔を向け始めたのです。お店がそっち側から入るようになってきたりとか。さらにみなさんもよくご存じのディスカウントストアが出店されて、そこが観覧車まで造ってしまって、ここまで行くと少しやりすぎで、金沢では多分これは「やめましょう」という話になるかもしれません。いずれにしてもそういうふうに、川に人の意識を向けるというのはすごく大事で、そういうときに、後で話をしようかと思っていたのですが、民間の役割もあるし、行政の役割もある。先導的に川を行政側が整えていくと、民間の側もそれに安心して付いていけるといいますかね、そういう両方の動きが大事なのだろうなと思って、今、聞いていました。

だいぶいろいろとそういう協議もされながら、苦勞もされているようでしたけれど、非常に心強いお話だなというのはやはりありました。

(川崎) ありがとうございます。いかがですか。

(小間井) 実は、その金沢片町まちづくり会議の活動を通じて、国土交通省の方の法律の関係で、これから国道に関わる協力団体を優先的に認定して、道路管理と美観について協力していただくという法律の制度ができて、その石川県の第1号の認定を実は金沢片町まちづくり会議が認定を受けました。おかげさまでとっていいのかなのか。そういうことになりました。

これは何ができるかという、本来、国道上は歩行者天国があってもそこで何かをしようとする、国土交通省の許可が必要なのです。当然だと思いますが、例えば片町や犀川大橋、あれは国道ですから、例えば歩道にベンチを出すなど、そういうもの全部に許可が要るのです。それからもちろん犀川大橋で何かを売ろうなどといったら、そんなのとんでもないという。

ところが、この道路協力団体になったことで、そういう営業活動、例えばオープンカフェなどをしていいですよというお墨付きを頂くことになりました。もちろんそこで得られ

る収益は道路の維持管理や環境整備に使うということがあって、そういう循環で商売していいですよということなのですが、そういう団体に認定されたおかげで、例えば犀川大橋で、犀川大橋の際に少し小さなポケットパークがあるのです。そこに例えばキッチンカーなどを置いて、そこでビールを販売して、犀川大橋の観覧沿いにスタンドを立てて、そこで立ち飲みをするなど、そういうことが実はできるようになりました。

気の早いわれわれの仲間は、今年の4月の花見のころにぜひそれをやりたいという中で、今、ない知恵と予算を絞り出して何ができるか考えています。それと同時に兼六園周辺、浅野川周辺は当然桜の名所ですし、非常にきれいなスポットがいっぱいあるのですが、実は犀川にも、室生犀星の記念碑や伊藤病院などがあるあの筋は、非常に桜の並木がきれいなのです。できればそこで桜の木だけをライトアップしてみたい。それで犀川大橋から一杯飲みながら眺めるという企画を、ぜひやってみたいということも考えたり。それは今年すぐできるかどうか分かりませんが、いずれにしろ、その川筋の景観を。

景観条例というと、条例というのは何か縛るようなイメージを持ちがちなのですが、先ほどから先生方のお話にもあったように、そこに住まう人がその川と関わって、その川の豊かさで自分たちの暮らしが豊かになるという、その本来持っている機能にふたをしたのでは、川筋条例といいますか、その意味としては本末転倒だろうと思うのです。ですから、そういうことがきちんとできるような豊かな川筋条例、川筋を守る景観であってほしいと実は今思っているのです、これからもよろしくお願ひしたいと思ひます。

(川崎) ありがとうございます。今、二つの川のお話を中心になっていますが、私は、京都と金沢の違いは、金沢は用水というネットワークが川に挟まれていて、非常に水路網の骨格がすごく綿密にあって、水辺に接している部分が大変多いまちだということです。

もう一つ、お堀もありますよね。照明の計画を近田先生とも一緒にやらせていただいたときに、長町の街灯はホテルの生育等の邪魔をしないようなあかりにしないといけないなどですね。あるいはお堀の白鳥路の方、少しホテルの時期に入りますと、皆さん電気を消してホテルを見ながら市民が楽しんでいるようなところがありまして、二つの川とお堀とそれから用水という、これだけ水に接しているまちなみで、先ほどお話にありました桜ですね。みまもりたいの方々や景観サポーターの方々、看板の話や樹木の話などもされましたが、緑、それからホテル、桜のようなもの、水に関わりながら人も通りというようなことを少し考えたりもしております。何かそういう、少し用水も含めた水のまちなり、そのまちの豊かさのようなことに関して、何かお気付きの点など思われることがあればお教へいただきたいのですが、いかがでしょうか。

小林先生などいかがでしょうか。用水やホテルがまち中に飛ぶことなどですね。

(小林) そうですね、例えば暮らしの本当に身近な場面で、水の恵みを受けているまちなのだなとすごく思います。私も金沢に来て、うちの学生で長町の方に住んでいる子がいて、たまたまホテルの話をしたら、「ホテルがいるよ」と聞いてびっくりしてしまったのです。あんなまち中の用水でホテルがいるということにびっくりしましたし、それから武

家屋敷を少し調査といいますか、案内していただいて見ていたときに、そこにお住まいの方に話を聞くと、大野庄用水の水を引き込んでいて、その用水から小アユが上がってきたなどですね。それは本当に用水があることによって、大きな自然とまちの中での暮らしがつながって、暮らしの身近な景色がすごく季節感にあふれて豊かになる。そういう暮らしを享受できるまちなのだなと思いました。

やはり大事なのは、そこでそのことをありがたく思うとか、しみじみと「ああ、水のあるまちに住んでいてよかったな」と、川沿いに住んでいるとか用水沿いに住んでいるということはある意味特権だなといいますか。私もさっき私の小さな汚い書斎からの眺めを見せましたが、実は自慢したかったのです。やはりそういう思いを持って水に接した所で暮らしていくということが、すごく大事なのだろうなと思います。

(川崎) ありがとうございます。時間もだいぶ迫ってきておりますが、もう一つ、近田先生、今日お話しいただいて、あかりがともるといのは、人の営みがあるという、何かそういう温かさや安心感などを感じたりもします。あとは景観的に言いますと、川があるというの、少し建物を対岸からは引いた所から見ますので、そういう意味での家並みの連続性などですね。立体な、連続の立面としても見えてきてしまうので、ある意味、逆に景観に責任を持たなければいけないことを再確認させられるような見え方もします。

近田先生が関わられたものを見させていただいて、川や水というのは、光を映しますよね。そうすると光がダブルシルエットのように見えてきて、かつ橋というのは流れではなくて、唯一垂直にあるものではないですか。すごく印象的に見えたりします。あと揺らぎがあって、ぴかっとした光ではなくて、何となく川面の動きを感じるなどというのがあります。近田先生が、そういう都市景観的なところでのライトアップデザインに対して、何かお感じになっているものがあれば。

(近田) 川が暗いということを先ほどおっしゃってましたよね。川というのは鏡と同じで、そこで反射して光は反対側に行くわけです。反対側から見れば見えるけれども、そうではない人からは見えない光だったりもするわけです。それをあまり意図的にやり過ぎても、また人工的になってしまうし、できるだけ暗い、暗さがあればこそ明るさも目立つのですが、その塩梅といいますか、その辺が難しいところだと思うのです。

一つ、何かきらきらきらっとするものの映り込みは、確かにいいのですが、きらきらきらっとし過ぎてしまうと、今度はその映り込んだ光がまぶしいというデメリットがあって、そこが川筋景観の一番の光の作り方として考えるべきところだと思います。

(川崎) お時間最後になります。川端様に活動の中で一番うれしかったり、達成感があつたり、何か強い思いがあったような場面や瞬間などがあれば、お教えいただきたいのですが。

(川端) そうですね。近所の方とお話などをしていいる中ではちょっと分からないのです

けれども、やはり自分が普段何気なく「すごくいいのにな」と思っていることでも、金沢に住んでいらっしゃる方は気付かないことがあります。格子だったり、格子自体がいろいろなところに生かされて、現代的なビルにまで生かされているというようなことを、活動を通して知ることや、そういう思いを同じくする人たちといろいろなことを調べていくとすることができるのが、とてもうれしいです。それが今だとインターネットにつながったりということなのですが、月に1回みんなで会って、実際に討論したり、実際外に出て一緒に調べたり、そういうことをする。少しアナログな感じで活動を続けていることが楽しいと思います。

(川崎)　そうですか。はい。お時間も来ましたが、われわれも市民として、最初に申し上げましたが、住んでいる者が築き上げて守るというようなことで、皆さまとともにこれからは川筋、あるいはまちなみの景観を良くしていくということで、協力させていただきたいと思いますので、本日はパネルディスカッションをこれで終了させていただきたいと思います。

